

第37回日本証券アナリスト大会を終えて

大会実行委員長 渡辺 英 克
(みずほ証券)

2022年10月14日に、「パーパス経営の実践—アナリストの役割は何か—」をテーマに、第37回日本証券アナリスト大会を開催しました。今年はアナリスト協会設立60周年という節目の年ですが、昨年に引き続きオンライン開催となりました。とはいえ準備段階から、記念講演やパネルディスカッションのテーマや人選に当たっては実行委員からの活発なご意見やご提案、ならびに事務局の方々のご尽力もあり、早々にプログラムも決まるなど極めてスムーズに準備が進められました。当日のご講演も大会テーマに沿う素晴らしい内容で大いに示唆、刺激に富むものとなり、またご講演者からの問題提起も寄せられました。加えて、事務局の方々の強力なサポート、当日の運営スタッフのお力添えなどもあり、リアル開催と遜色のない内容、進行であったかと思います。皆様には心より御礼申し上げます。

昨年のテーマは「ポストコロナ時代を切り拓く企業とアナリストの役割—変革に向けて立ち上げられ日本一—」でした。今年は各委員からは、①SDGs、ESG、脱炭素関連、②デジタル化、新技術関連、メタバース、Web 3、③パーパス経営、④構造改革、企業価値向上など、長期的視点でかつ奥の深いテーマがいくつも提案され、いずれも



渡辺大会実行委員長

が興味深く甲乙つけがたいものでありました。一方、最近の大会において、気候変動やサステナビリティが取り上げられていることや、昨今の資本主義や企業経営のあり方が問われていることなどを勘案し、「パーパス経営の実践」を大会テーマといたしました。また、アナリストがどのようにとらえ、実行していくべきかという思いも込めて、昨年、一昨年と同様に、「アナリストの役割は何か」をサブテーマといたしました。

記念講演Ⅰでは、京都先端科学大学教授兼一橋ビジネススクール客員教授の名和高司先生に、「資本主義から志本主義へ」をテーマにご講演いただきました。ご講演では、20世紀の資本主義（キャピタリズム）は、使命＞構想＞理念という3階層で構成されているのに対し、21世紀の志本主

義（パーパスイズム）は、志＞夢＞信念の3階層であり、特に志は大事であるということ、また志本主義においては「Sustainability」「Digital」「Globals」という新SDGsと、その中心にあるのが志であるというご説明がありました。後半では実例や実践として、ソニーグループ、味の素、リクルートホールディングス、花王、SOMPOホールディングスなどの例が取り上げられ、理論とケーススタディの両方を学ぶことができました。

記念講演Ⅱでは、SOMPOホールディングスグループCEO取締役代表執行役会長、経済同友会代表幹事の櫻田謙悟氏による「生活者（SEIKATSUSHA）共創社会の実現に向けて」と題するご講演がありました。価値とは何かについて、いろいろな企業、セクターの時価総額の推移などをお示しいただいた上で、新しい企業価値評価の探求という問題提起がなされました。そして新しい価値基準としてのHappiness (Well-being) とパーパス、社会貢献という企業の価値についてのご説明と、企業ができることについて一つの事例としてSOMPOの積極的なタウンホールミーティングなどのご紹介がありました。生活者（SEIKATSUSHA）共創社会の実現に関しましては、定性的、定量的に生活者共創社会をお示しいただいた上で、具体的手段や生活者が果たすべき責任について言及されました。櫻田会長のご講演は随所にわたって問題提起がなされましたが、とりわけ「すべきことははっきりしている。あとは実行」というご発言と、会社のパーパスとMYパーパスの交差するところにパッションがあるのだというお考えが強く印象に残りました。

後半の部では、「パーパス経営の実践—アナリストの役割は何か—」と題してパネルディスカッションが行われ、不二製油グループ本社の酒井幹

夫代表取締役社長、エーザイの内藤晴夫取締役兼代表執行役CEO、みさき投資の中神康議代表取締役社長の3名と、司会としてアイディール・リーダーズの共同創業者CHOの丹羽真理氏が加わり、活発な討議が行われました。IRの場での経営陣とアナリストとの対話においては、短期的な視野での会話が多いこと、双方が腹落ちできるような経営に関する深い議論がなかなかされにくいこと、またアナリストの社会へ果たす役割、貢献などに関する問題提起などがなされました。

最後に、大会全体を通じて感じたことを述べてさせていただきます。第一に、政治や経済、金融、地球環境、技術革新、人々の価値観などが大きく変化する中で、パーパス経営はそれらに 대응得るであろう切り札の考え方ではないかという点です。パーパスイズムは、それらの課題を包含することのできる概念で、「21世紀はパーパスイズム」であるとする名和先生のご指摘はその通りだと感じました。第二に、櫻田会長のご指摘の通り、パーパスは経営のみのテーマではなく、従業員もまたそれぞれのMYパーパスがあり、両者のベクトルを合わせる事が重要だという点です。また、アナリストは企業分析の際に、パーパスイズムを切り口の一つとして持つておくべきであると同時に、アナリスト自身もMYパーパスを持つべきであると感じました。第三に、アナリスト自身がMYパーパスを持った上で、果たすべき役割を常に意識しながら、長期的、多角的な視点で企業の分析や経営陣との対話を図っていくことによって、資本市場や社会全体に対してより一層貢献していかなければならない、そのことを日ごろから意識するようにしなければならぬと強く感じました。最後になりますが、ご講演いただいた皆様、関係者の皆様には改めて心より御礼申し上げます。